2 Ep- 7　子どもの家庭生活と共感性、個別性、セルフ・エスティーム（第７報）　性情報と性意識に関わって

木田淳子*、○奈良由美子*、藤田祥子、守野美佐子、高野愛子、辰巳理恵子、野口知有**、藤本多賀子**

（*大阪教育大、**大阪教育大・院）

【目的】情報化社会に生きる子どもたちはメディアを通じて多種大量の情報を入手している。本報告では，性情報をめぐる子どもの実態を把握したうえで，家庭生活を中心とした大人の対応とその子どもの性意識への影響力，および子どもの共感性，個別性，セルフ・エスティームと性意識との関連を明らかにするものである。

【方法】調査方法については第１報に同じ。調査内容として，まず性情報をめぐる子どもの実態については主な性情報源と接触頻度をおさえる。性情報をめぐる家庭の直接的関与として親子間での性に関する話し合いの有無とこれへの感想を，さらに間接的関与としては家庭内の親子関係をおさえる。そして性について妥当な判断ができているかどうかを「テレクラ/売春をどう思うか」によってとらえ，これと接触する性情報の種類と量，親の直接的・間接的関与，子どもの共感性，個別性，セルフ・エスティームの各変数との関連性をクロス集計によるカイ二乗検定に基づき検証・考察していく。

【結果】学年別/性別の違いが若干あるものの，総じてビデオ・雑誌を主な性情報源としこれらへの接触頻度が高いものほど，テレクラ/売春を肯定する傾向にある。一方，教師/授業により性情報を得ているものはテレクラ/売春を否定的にとらえている。家庭にあっては，性について親と話をすることが必ずしもテレクラ/売春を否定することに関与していない。しかし，家にいるとほっとすることや親との会話で心が落ち着くことと，テレクラ/売春を否定することとが関連しており，また共感性の高さがテレクラ/売春を否定する程度と強く関連していることから，親は間接的に性意識の形成に関与しうるといえよう。